

研究ノート

「母親」たちはなぜ「座り込み」をしたのか

―一九七八年の豊島園場外馬券売場反対運動

増 渕 美 穂・石 倉 香 鈴

はじめに

豊島園場外馬券売場問題とは、経営不振に陥った豊島園がその打開策として馬券売場を園内に建設しようとしたことに対し、地元練馬区住民が反対運動を展開し、建設申請を撤回させた事件である。この事件は一九七五年と一九七八年の二回にわたり繰り広げられた。その事実に関して、『練馬区議会史』^①に概要が記されているものの、詳細はこれまで明らかにされてこなかった。^②本稿では、「座り込み」という特徴的な出来事が発生した一九七八年の馬

券売場建設問題のプロセスと反対運動の論理に関して、主に「練馬母親連絡会」^③の資料群（立教大学共生社会研究センター所蔵）を通して明らかにすることを課題とする。この資料群は、「母親」たちの馬券売場建設反対派の視点による記述であるという特徴を有するが、これらの資料を用いることで、住民運動側から見た運動の特質を描くことが出来る。

当時の練馬区は革新区政がしかれており、今回の豊島園場外馬券売場反対運動も、革新区政を支えていた住民運動の一環と捉えられる。「母親」たちは区政・都政との関係

「母親」たちはなぜ「座り込み」をしたのか（増淵・石倉）

を強く意識して運動を進め、革新自治体の支持基盤となっていたことがうかがえるが、場外馬券売場問題の際に「座り込み」という実力行使に出た理由は不明である。それでは「母親」たちはなぜ、通常行うことがなかった「座り込み」という、リスクを伴うような行為をしたのであろうか。また、近年の革新自治体の研究は首長側から描かれることが多かったが、住民運動側からその特徴を描くことで、革新自治体の新たな側面を提示できる。

本稿の構成としては、第一章は、豊島園場外馬券売場問題に関して、従来研究史上では明らかにされてこなかった、当時の状況を描くことを目的とする。それを踏まえ第二章では、そこに特徴的な動きをした「母親」たちの行動を通して、「座り込み」の意義を示していく。研究史上明らかにされている母親運動と区政・都政との関係を前提として、以上の分析を通して、これまでの研究が対象としていない、豊島園場外馬券売場反対運動における「座り込み」の論理を解明する。

なお本稿では、豊島園場外馬券売場反対運動に参加していた女性たちを、鍵括弧を付した「母親」として表記している。なぜなら、本運動に携わった女性たちの中には、練馬母親連絡会に所属しているものの独身で子どもを持たない女性もいれば、連絡会には所属しないものの、地元PT

Aの役員として、署名活動に奔走した女性などもいた。このような、様々な女性が本運動に参加していたためである。執筆分担に関しては、「はじめに」と「第一章」が増淵美穂、「第二章」と「おわりに」が石倉香鈴となっている。

第一章 豊島園場外馬券売場建設問題に見る、革新派住民の動き

（一）豊島園の場外馬券売場建築申請

豊島園とは、練馬区に所在し、西武グループに属する株式会社豊島園が運営していた遊園地である。豊島園はオイルショックの影響で営業不振に陥っていると報じられており、その経営問題を解決するために、馬券売場建設が目指されるようになったという。一回目の建築確認申請は一九七五年二月五日に練馬区役所に提出されたが、周辺住民と地元PTAを中心に結成された「豊島園場外馬券売場建設反対同盟」（以下、反対同盟と記す）や、区立南町小学校PTAなどを中心として反対運動が巻き起こり、一九七六年一月二三日の練馬区議会環境建設委員会にて不採択となった。

しかし豊島園は一九七八年三月八日に、二回目の建築申請を再び練馬区に提出した。詳しい計画内容は図一の通

りである。計画遂行に当たって豊島園側は、未亡人会や地元のPTA、地元商店会や母子家庭福祉連合会、自民、民社、公明党の各区議会議員に根回しを行ったという。

一九七八年における建築申請の提出は、賛成派を中心に水面下に行われた。そのため、反対同盟を中心とした「練馬母親連絡会」（以下、主語として用いる際は連絡会側と記載）などの馬券売場建設反対派の具体的な動きは、建築申請が出されたのちに見られることになった。

（二）建築申請が出されたのちの反対派の動きと、賛成派による「強行採決」

連絡会側が豊島園の建築確認申請の存在を認識したのは、豊島園が申請を出した翌日の三月九日であった。それを受け翌日以降、反対同盟などから連絡があり、連絡会は二七日の本会議に間に合うよう、一七日に区議会への陳情に関する打ち合わせを行うことになった。なぜなら、建築確認申請の付託先となっている都市・環境委員会の今回の構成議員は賛成派である自公が六人、反対派の社共が二名であったため（図二）、連絡会側は採択では見込みはないと考えたためである。そこで連絡会側は、環境以外の委員会である文教、交通、企画、総務の各委員会にかけられるようなものにするべく、討議を行って内容を練り、その内

容を直接議長や区長、教育長に提出することにしたという。

三月一七日には予定通りに、母親連絡会による陳情内容に関する打ち合わせが行われた。ここでは「各グループ、団体、PTA、またはPTA有志の名で」、数多くの陳情が準備された。翌一八日には反対同盟を中心に区長、区議会議長、教育長へ直接申し入れを行うほかに、請願と陳情が区議会に提出された。そしてその日以後も、本会議に向けて数多くの請願・陳情が提出された（図三）。反対派の提出理由で多くを占めていたのは、青少年への影響（二六％）と、教育環境を破壊する恐れがあること（一五％）であった（図四）。

打ち合わせ以後から本会議最終日にかけて提出された請願・陳情の傾向よりみると、件数に関しては、陳情・請願をそれぞれ合計すると賛成派は一七七件、反対派は一五三件であり、賛成派の方が多い。一方、署名数では賛成派は二万二四一二件、反対派は三万四二九四件となっており、反対派のほうが約一万一〇〇〇件も多かった。それにも関わらず、その後の委員会では賛成派の意見が採択されて「強行採決」となるが、なぜこのような結果がもたらされたのだろうか。

理由としては、連絡会側が自覚していたように、今回の

「母親」たちはなぜ「座り込み」をしたのか（増淵・石倉）

問題の付託先である都市・環境委員会での革新派勢力の弱さが考えられる。一九七三年より練馬区政は田畑健介（無所属）区長のもとの革新区政であったものの、革新自治体後期にはその地盤が弱体化してきていた。結果、区議会議員での党派傾向としても保守派が七割を占めており（図二）、こうした「党派のねじれ」が、請願の紹介議員の傾向や、都市・環境委員会の構成員にも影響を与えていたと見える。しかし一方で、反対派が請願に際し、決して革新党派議員のみを頼るのではなく、革新党派議員の署名数以上に、保守系の議員へ多くの請願署名を求めている点は、注目に値する（図五）^⑬。

またもう一つの理由としては、もともと豊島園側は「強行採決」するつもりで行動していたことである。賛成派は建築申請を出すにあたり、上述したように地元のPTAなどに根回しを行っていた。かつ、建築申請を出す時期も三月八日に行われた練馬区議会第一回定例会の一般質問が終わったところを見計らって提出し、賛成派にとって有利に事が進むようにしていた。そして反対派が行動を起こさぬうちに委員会を開いて審議を重ね、本会議最終日である三月二十七日（月曜日）の直前にあたる二五日（土曜日）に「強行採決」を実行する狙いであったのである。

「母親」たちは一七日以降、引き続き陳情・請願提出を

行なうほかに、三月一五日と一八日に開かれた委員会を傍聴していたが、事が大きく動いたのは二四日であった。この日は三回目の委員会が開かれたものの、豊島園側による一時間ほどの簡潔な説明に留まった。そして夜になると、連絡会側に、明日強行採決をするという趣旨の連絡が入る^⑭。

二五日には、一二時半より四回目となる委員会が開会したが、これは保守側の要求によって急遽開かれたものであった。委員会の最中に委員らは後樂園と豊島園現地に視察に行き、夕方の五時に再び開会となる。まもなく桶直正委員（自由民主党）の「もう四回も委員会を開いて十分審議をしたのだから採決に入れ」という採決要求があり、革新派の議員が発言を求めて手を挙げている最中に、「強行採決」となった^⑮。

以上より、賛成・反対派両者共に苛烈な請願・陳情合戦が行われたが、反対派にとっては、連絡会側をはじめとする努力は叶わず、委員会の結果から評価すると失敗に終わったと言える。先述したように、連絡会側は当初より「強行採決」される可能性を理解した上で行動を起こしていたが、その予想が現実となったのである。区長は明確な意思表示を控え、連絡会側の直接行動である申し入れも効果を示さなかった。加え、保守派が多数を占めていた都市・

環境委員会によって陳情・請願が正当な方法で判断されなかったことで、「強行採決」される結果となった。しかし、この膨大な陳情の署名集めが実現したのは、練馬母親連絡会を含む反対同盟のほか、地元学校のPTAの働きかけもあり、クラスから選出されているすべてのPTA役員が署名集めに奔走した「母親」たちの成果である。

(三)「強行採決」以後行われた、反対派による「座り込み」

三月二七日は区議会本会議の最終日であったが、予定していた委員会や本会議は夜になっても開かれなかったため、そのうち反対住民らが市役所のロビーに大勢集まっていた。『豆ニユース』によると、この日詰めかけた人は約六〇〇人、徹夜を通して座り込んだ人は一八〇人余であったという。この座り込みが功を奏し、公明党が反対側になったという二八日の深夜午前二時頃に豊島園側は一斉に引き上げ、ここにて「強行採決」は覆された。

その後、会期を一日延長して二八日午前九時から開かれた本会議にて「強行採決無効、継続審議」となった。そして四月二八日に豊島園場外馬券売場の建築確認申請が取り下げられる。ここにて馬券売場建設は一旦白紙に戻され、⁽²⁵⁾「強行採決」を巡る運動はひと段落つくこととなった。⁽²⁷⁾

(四) 小括

豊島園場外馬券売場建設問題における革新派の動きは、陳情・請願合戦の努力も叶わず、保守派が多数を占めていた委員会によって反対派の陳情・請願が公平な観点で取り扱われなかったことで、「強行採決」されることとなった。そのため、反対派は次なる行動として実力行使である「座り込み」を実行し、「強行採決」は覆されることとなったのである。

そこで第二章では、豊島園場外馬券売場反対運動において象徴的な活躍を見せた「練馬母親連絡会」の三人の「母親」たちを見ていく。その際には、「母親」たちが残した記録を用い、どのような思いで運動に突き動かされていたのか、「母親」らが持つ問題意識に迫っていく。

図一 豊島園による資料説明の内容と、賛成派・反対派の構成員

豊島園の計画内容		
<p>場 所： 豊島園内、フィールドアスレチック跡地 敷地面積： 約 18,000 平方メートル 建 物： 二階建て鉄骨造、延べ面積 6,000 平方メートルで建設 建物所有： 城北駐車場株式会社（代表：梅原省三郎） 運 営 者： 特殊法人 日本中央競馬会 発売日数： 土日祝（平日は営業しない）</p>		
<ul style="list-style-type: none"> ・中央競馬会初めての登録会員制（約 3 万人）を採用する ・会員には車利用を禁じ、公共交通機関を利用するよう要請するため、交通混雑・渋滞問題は解決できる ・会員のみに限るため、ゴミなどの環境公害を押さえられる ・登録される利用者をチェックでき、また園内に設置するため、学生、未成年を除くことができる。それによって青少年への悪影響は抑えられ、教育上の問題も解消される ・付近の地域には競馬会による資金援助を行うため、近隣の地域の環境整備が進む（道路、下水道、学校、幼稚園、福祉施設などの整備拡充。他、防火設備などの地域の備品を寄付） ・環境交付金は、豊島園の場合の予定額は 5000 万円前後を想定している ・地元の女性（特に母子家庭の婦人）を優先して雇用するため、不況の中での良い働き口となる ・清掃員には主に高齢者を優先採用する 		
	賛成派	反対派
主な構成員	<p>株式会社豊島園 城北駐車場株式会社 未亡人会（正式名称不明） 地元 PTA（具体的な地名は不明） 地元商店会（向山） 母子家庭福祉連合会</p>	<p>豊島園場外馬券売場建設反対同盟（代表：荒井寿雄） 区立南町小学校 PTA（代表：水野弁雄） 練馬母親連絡会（馬券売場問題担当は蔵園正枝、姉齒久子、松本輝代） 練馬区労働組合総連合 練馬区労働組合協議会 その他近隣住民など</p>

「母親」たちはなぜ「座り込み」をしたのか（増淵・石倉）

出典）「限定会員制 豊島園内場外勝馬投票券売所開設について」（『豊島園場外馬券売場反対（七五一七八）』立教大学共生社会研究センター所蔵）、「連載 住民自治への模索 第一回 練馬母親連絡会にみる主婦たちの住民運動」（『住民と自治』一六四号、一九七七年一月）三四頁、「『馬券売り場』で練馬揺れる 豊島園に新設計画 賛否両論また激突」（『読売新聞』一九七八年三月一六日、朝刊地方欄）、「土壇場の攻防 豊島園の場外馬券売り場 深夜議会で延々と」（『読売新聞』一九七八年三月二八日、朝刊地方欄）。

図二 昭和五三年当時の都市・環境委員会メンバー（下左図）と、練馬区議会議員の党派傾向（下右図）

地位	名前	所属	自公	社共	党派		人数	割合
委員長	高橋哲夫	民社党	1		自公	自由民主党	26	39 (70%)
副委員長	岡本和男	日本民主党		1		公明党	10	
委員	横山繁雄	自由民主党	1			民社党	3	
	楠 直正	自由民主党	1		社共	日本共産党	8	17 (30%)
	野瀬常信	自由民主党	1			日本社会党	9	
	矢崎久雄	自由民主党	1		総計			56
	安藤美義	公明党	1					
	矢沢重光	日本共産党		1				
総数			6	2				

出典）前掲「資料編」『練馬区議会史』九六頁、四三一～四三三頁。

図三 一九七八年に見る、豊島園場外馬券売場に関する請願・陳情数

		請願				陳情			
		賛成		反対		賛成		反対	
		件数	外署名の人数	件数	外署名の人数	件数	外署名の人数	件数	外署名の人数
2月	10日							1	4
	11日							1	67
	12日					1	55		
3月	14日			1	12,431	7	1,421	15	807
	15日					16	1,925	1	1
	16日					9	856	2	454
	17日			1	573	4	566	33	6
	18日			3	1,085			22	1,021
	19日								
	20日					34	3,560	3	189
	21日								
	22日			2	441	47	4,170	18	4,151
	23日			5	5,664	16	1,672	18	45
	24日	1	62	9	1,457	40	5,530	16	3,454
	25日					2	2,595	24	912
6月	27日			1	980			7	552
計		1	62	22	22,631	176	22,350	131	11,663

出典）『練馬区議会年報 昭和53年版』（練馬区議会事務局、一九七九年）八四～一九五頁。

※「外署名の人数」とは、陳情・請願の代表提出者のほかに、その陳情・請願に賛同した署名者数を示している。

図四 賛成・反対陳情の内容とその傾向

賛成陳情・請願の内容	割合	反対陳情・請願の内容	割合
地域社会（学校など）と地元商店街の繁栄をもたらす	17%	1. 教育環境を破壊する	15%
限定登録会員制という新しいシステムで、ゴミ公害、青少年への影響などといった諸問題は解消される。	17%	2. 青少年に悪影響をおよぼす。	16%
環境整備、福祉活動に対する具体的援助が期待できる。	12%	3. 地域環境を破壊する。	9%
豊島園は災害時における重要な避難場所となる。よって、その安全なる空間確保は豊島園の安定した経営によってこそ可能である	1%	4. 社会環境を破壊する。	3%
競馬は健全な大衆娯楽として国民各層に愛好されている（競馬ファンの夢が叶う）	11%	5. 自然環境を破壊する。	2%
働く女性の職場が獲得される	16%	6. 生活環境を破壊する。	8%
青少年に与える影響はない	11%	7. 交通公害をもたらす。	12%
社会事情を大局的に考えると有効面が多い	11%	8. 歴史的遺産を破壊する。	3%
緑を保護できる	0.3%	9. 基本構想に反する。	3%
環境清掃が徹底される	3%	10. 建築確認をおろすな。	12%
		11. 文教委員会で審議されたい。	3%
		12. 交通対策特別委員会で審議されたい。	1%
		13. 教育委員会で審議されたい。	2%
		14. 教育的観点から調査されたい。	8%
		15. 豊島園に関し、民意が反映できる委員会を設置されたい。	2%
		16. 教育と交通の面からも審議されたい。	1%

「母親」たちはなぜ「座り込み」をしたのか（増淵・石倉）

出典）前掲『練馬区議会年報 昭和 53 年版』八四～一九五頁。

図五 請願紹介議員の記名数・党派傾向

賛成派議員の請願記名数				反対派議員の請願記名数			
議員名	所属	自公	社共	議員名	所属	自公	社共
高橋 威司	自由民主党	1		高橋 威司	自由民主党	19	
安藤 美義	公明党	1		追田 利行	民社党	20	
大橋 静男	民社党	1		田中てるみ	公明党	18	
総数		3	0	越後 幹雄	自由民主党	11	
				宇野津定三	公明党	3	
				中本ひろし	日本共産党		22
				小又 恒男	日本共産党		16
				正清 太一	日本共産党		7
				土屋 新一	日本共産党		1
				田原 寿恵	日本共産党		1
				総数		71	47

出典）前掲『練馬区議会年報 昭和 53 年版』八四～一九五頁、「資料編」『練馬区議会史』練馬区議会、一九九一年、一八～四九・四三一～四三三頁。

第二章 「座り込み」に参加した「母親」たち

(一) 練馬の「母親」たち

反対運動に参加していた練馬母親連絡会とは、一九五四年の第五福竜丸事件をきっかけに開催されるようになった日本母親大会を端緒として一九五七年頃に結成された、練馬区の女性運動の中核となるグループの一つである。²⁸⁾彼女たちは、東京二三区でインフラの整備が立ち遅れていたことを意味する「練馬格差」の解消を目指すべく、それぞれ問題関心のある教育、福祉、消費者、都市計画、環境などでグループを作り住民運動を進めた。そして各人がそのグループの進捗状況や課題を月一回の練馬母親連絡会の定例会や臨時の連絡会で持ち寄り、機関紙『豆ニュース』を発行するなど、各グループで課題を共有しながら運動を進めていくというスタイルをとっていた。そこでは「自分がいま一番困っていること、腹をたてていることをひっさげて、いそいそとあるいは血相変えて連絡会に集ま」り、「自分のかかえている問題を解決するための活動のしかた、道すじを見つけ」ていったという。連絡会には会則もなく、会長などの役員も置かず、交代で数人が事務局を担当していた。豊島園場外馬券売場反対運動でも、練馬母親連絡会は馬券売場建設に反対し署名運動や座り込みを行った。しかし

ながら、「座り込み」という実力行使に訴える手段は日ごろの「母親」たちの活動とは一線を画すものである。ではなぜ「母親」たちは通常的手段とは言えない「座り込み」を行ったのだらうか、そしてそこにはどのような論理の特徴を有していたのであろうか。

(二) 「母親」たちの運動の論理とは

ここでは、ともするとリスクの高い「座り込み」という運動手法に注目し、これに参加した練馬母親連絡会関係の三人の女性たちの手記をもとに「母親」たちの座り込みの動機やその論理を検討する。さらにこの三人の述懐は、「子どもや暮らしのため」という従来の母親運動の評価からみると、どのような特徴を有するのにも注目していきたい。

・蔵園正枝の述懐

蔵園は一九四九年に練馬区に転入し、第二回日本母親大会への参加などを通して、練馬母親連絡会発足とともに活動を行うようになった。²⁹⁾蔵園は強行採決当日の様子を『豆ニュース』二四号で語っている。³⁰⁾蔵園は、座り込みには「強行採決によって危機感を持った人々が、今まで来なかった人々をさそい、周辺の人たちは子ども連れで集」まったと語っている。蔵園の語りで注目したいことは、あくまでも

「母親」たちはなぜ「座り込み」をしたのか（増淵・石倉）

「強行採決」という議会の方法に対する危機感を中心として記述していることである。第一章で見たように豊島園場外馬券売場設置反対運動において議会に提出された請願や陳情書では、主に教育環境や、青少年への影響を反対理由として主張していた。しかしながら、『豆ニュース』における蔵園の主張にはそれが登場しない。むしろ、蔵園は「もし強行採決でもされたら報道してもらいたい」と考え、各新聞社に電話をしてマスコミも利用しながら訴えていくなど、「強行採決」自体への危機感をあらわにしている。

そして蔵園は、「半月の運動の中で一番強く感じたのは、たとえ区長がはつきりしなくても、革新区政によって私たちは守られていること、革新だからこそ退去を命ぜられることもなく坐りこみが出来たこと」だと振り返る。さらに「革新区政は何としても守らなければと決意を新たにした」とも言っている。蔵園が重要視する「革新区政」のあり方とは、革新区長のリーダーシップではない。蔵園が「革新」に込めた意味とは、多くの陳情・請願合戦と、署名による反対運動がないがしろにされない、行政や議会の在り方にあった。そしてそこから逸脱した強行採決は蔵園にとって許容できないものであった。

以上の語りからは、従来の住民運動の方法に反した議会の「強行採決」への危機意識が見えてくる。蔵園が座り込

みを行った主たる理由は、「子どもや暮らし」からの関心とともに、住民自治の在り方をないがしろにされたという政治的関心からであった。

・福富美津代の述懐

福富は、一九六一年より練馬区関に居住し、一九七一年の関中学校新設運動を通して、練馬母親連絡会と接点を持つようになった。³⁵ 福富は『豆ニュース』二四号にて、二五日の強行採決後の座り込みに参加した体験談を寄せている。³⁶ 福富によると、『午前中議運で午後本会議よ』というお電話をいただいた時は、どんな無茶をやるか行って見てこようと思っただけで出かけた³⁷ が、「思いがけず徹夜の座り込みに加わり、時々刻々と事態が変化し、遂には強行採決無効になるまでの経過を見届け」たという。

福富の語りで特に注目したいのは、「夕方になれば、お母さんたちは夕飯の支度で帰るだろう、まさか深夜までとは、敵側はイカツイ男共をとつかえひつかえ動員して、こちらが手薄になったところで強引にやってしまおうとひきのばしていたようですが……ドッコイ亭主の帰宅時刻になると、ロビーの赤電話は満員、『帰れるものか』と子ども連れの若いお母さんも夜更けまでがんばっていました」という記述である。

この語りの中で重要なことは、夕方になっても夕食の支度などで帰宅せず、夫に電話をしてまで座り込んだ様子が描かれていることである。当時の「母親」たちにとって、こういった運動に参加することが難しい状況にあったことは、想像に難くない。特に夜間となればなおさらであろう。このような「母親」たちの運動参加の状況について、一九七〇年代当時に同じく練馬母親連絡会メンバーであった岡田京子は以下のように語っている。

「私がよく出歩くし、電話もかかる。PTAの会長をしていた（中三の時）一年間は、どんなに遅くなっても何にも言われなかった。週五、六日出ていたんですよあの頃は・・・（中略）・・・わたしも最初は気にしていましたが、今では平気で出かけていきます。でも、まだ一泊旅行は許されないんです。・・・（中略）・・・やることやって出ていくことに對して、最近やつと昼間だけは黙認したと言っています。『夜はまだだぞ』って言ってますが、年に一、二回夜出るときは、当日早口で言って出てくるんです」。

このように、当時の女性たちの中には、運動参加、特に夜間に家をあけるような活動に参加することが難しいと感じる者も少なくなかった。しかし、福富の文章からは、それにもかかわらず座り込みを続けることを選択した女性たちが見えてくる。蔵園の語りとは異なる、「母親」役割と

の関連で躊躇する意識がありつつも、それを払拭して行動する女性たちの姿である。

さらに福富は、豊島園側の馬券売場設置の手口について「お金がおちるということをうまい話にすれば通るなどと、住民を馬鹿にしたやり方」は「許されない」と述べている。ここでも、豊島園場外馬券売場反対の理由として「子どもや暮らし」を理由とせず、「住民を馬鹿にしたやり方」が許せないという点に怒りの矛先が向かっていることに注目したい。

以上の福富の語りからは、特に外出が厳しくなる夜にかけて「母親」役割に躊躇しつつも座り込みに参加する「母親」たちの様子がみえてくる。また福富は蔵園と同じく、「子どもや暮らし」の環境が悪化するということに加え、自分たち「住民」を「馬鹿された」という怒りから座り込みに参加している様子が分かった。

・松本輝代の述懐

松本は、一九七〇年代の練馬区の婦人学習グループ「たんぽぽ」の代表メンバー^⑤でもあり、練馬母親連絡会にも顔を出していた。そして一九七八年の東京母親大会で、練馬母親連絡会の代表として豊島園場外馬券売場反対運動について報告している。報告によると、「子供達のために反対しなければ」と署名集めを行う「母親」の姿があったこと

「母親」たちはなぜ「座り込み」をしたのか（増淵・石倉）

を紹介しながら、この強行採決が「余りにも無暴（ママ）な、子供達に見せたくない、最も質の悪い」ものであったと強調している。また、議会終了後に委員長が豊島園の傍聴者に守られて雲がくれたことについて、「私達はあ然とし、国会なみの暴力採決だと思いが燃え上がりました」と怒りを露わにしている。ここでも注目したのは、「子供達に見せたくない」ものは馬券売場そのものではなく、「無謀な」議会の様子にあると松本は考えている点である。このように松本も蔵園、福富と同様に議会の暴力的なやり方に対して怒りを露わにしている。

さらに松本は座り込みの様子について、「夕食の支度や、子供を夫にあずけに帰った母親も、またロビーに戻ってきた、二百人が座りこみました」と、夫に子どもをあずけることができた「母親」の様子も描いており、この点は注目に値する。

このように松本の語りからは、「子供達のために反対しなければ」と積極的に活動する「母親」たちの姿がわかる。また福富の述懐とは異なって、夫に子どもを預けるような「母親」役割という性別分担を流動化させていくことにつながる可能性を持った場面があったことも注目したい。さらに、強行採決について「国会なみの暴力採決だと思いが燃え上り」ったと述べているように、蔵園や福富と同様、

松本も馬券売場そのものに加え、強行採決という政治の在り方についての批判を行っている。ここから、松本の座り込みの論理としては、子どもに悪影響なものは馬券売場にとどまらず、まさに「暴力的」な議会の在り方にあると考え、その議会への怒りから座り込みに参加しているというものである。この松本の述懐からは「子どものため」という母親役割を意識しつつも、性別役割分業を揺るがすような場面があったこと、さらに強行採決それ自体への批判から反対運動に参加していたという二つの特徴があると分かった。

（三）まとめ

「家庭」や「子ども」の存在が「座り込み」へのさまざまな躊躇となりつつも、それを乗り越えて行動したのは何故だろうか。それは三人の語りにも表れているように、馬券売場そのものへの反対意識に加え、当時の議会の在り方への批判を理由としていた。ただ単に『練馬区議会年報』の請願・陳情書を見る限りでは、子どもや家庭環境に悪影響を及ぼすという理由で馬券売場設置に反対している面だけが見えてくる。しかし、この「母親」たちの語りからはそれに加え、むしろ女性たちの運動の参加の論理として、強行採決を行なった議会への反発がみいだせる。従来の運

動とは異なる手段に打って出たのは、「強行採決」を行う革新区政への強い危機意識が生じたからであった。

おわりに

第一章で述べたように、反対運動は、賛成派の請願陳情件数が多数となり三月二五日の委員会での採決を許すことになったが、それは単なる「反対派」による運動の「失敗」ではなかった。なぜなら、保守派が多数を占めていた委員会のために反対派の陳情・請願が公平な観点で取り扱われず、「強行採決」という議会の選択のもとでの失敗であったためである。だからこそ、第二章でみたように、「母親」たちは請願・陳情で訴えていた「子どものため」であることとともに、公平性を欠いた議会の在り方に対して危機感を覚え、「座り込み」という手段をとった。かつ、そこでの「座り込み」は、「夜」という時間を徹して行われた。豊島園場外馬券売場反対運動における「母親」たちの行動は、地方自治の担い手としての経験を通じて、従来の先行研究上で描かれていた母親役割という枠組みを乗り越えようとするものであったと評価できる。こうした「母親」たちを始めとする住民運動が、一九七〇年代の練馬区革新区政を支えていたのである。

「母親」たちはなぜ「座り込み」をしたのか（増淵・石倉）

註

- (1) 『練馬区議会史』（練馬区議会、一九九一年）四七三～四七七頁。
- (2) ほか、当時出された請願・陳情は『練馬区議会年報 昭和53年版』（練馬区議会事務局、一九七九年）にまとめて記載されている。
- (3) 練馬母親連絡会に関する研究史としては、「練馬女性史を拓く会」によるものがあり、今日までに計八冊刊行されている。「練馬女性史を拓く会」は、連絡会に所属していたメンバーへの聞き取りや、連絡会が残した資料を元に、練馬区の地域女性史として女性たちの運動の軌跡を学習、調査・研究、出版しているグループである（山寄雅子「市民運動を記録する営み―記憶（運動経験）を継承する―」『社会文化研究』第一八号、社会文化学会、二〇一六年、九六～九七頁を参考）。
- (4) 『始まりはひとりから 練馬の女性たちの記録』その一（二〇〇三年）、その二（二〇〇五年）、その三（二〇〇七年）、総論編その一（二〇一〇年）、総論編その二（二〇一二年）、総論編その三（二〇一五年）、総論編その四（二〇一七年）、総論編その五（二〇一八年）。
- (5) 第十四章 保守の都政奪還への道 源川真希『東京市政首都の近現代史』（日本経済評論社、二〇〇七年）二九一～三九二頁。
- (6) 「区議会 深夜までもむ 反対派 庁内座り込み 練馬」『朝日新聞』一九七八年三月二八日、東京朝刊。またプール来場が見込める夏場に比べ、冬場に客足が途絶える厳しい実情もあった（「競馬…豊島園の場外馬券売場、建設計画白紙に」『毎日新聞』一九七八年四月二九日、東京朝刊）。
- (7) これを遂行するに当たって豊島園は別会社である城北駐車場を設立し、豊島園駅の東側にある三階建て駐車場を場外馬券売場に改造し、中央競馬会に賃貸することを計画した（インサイド・レポート 最後の希望も断ち切られた豊島園の行方、『実業界』四九二号、一九七六年三月、四二頁）。背景として、当時中央競馬会の場外の売り上げ比率が場内と比べて逆転していることから、場外売場の整備・拡充を狙っていたことがあった（社会トピックス 豊島園の場外馬券売場に再度「待った」―計画変更して申請したが、継続審議に―、『実業界』五四一号、一九七八年五月、一五頁）。
- (8) 不採択の理由は、「環境破壊、青少年の非行化を招く、車公害を引きおこすなど、マイナス面が強い」ことであった。前掲「インサイド・レポート 最後の希望も断ち切られた豊島園の行方」（注六）、四三頁。
- (9) 建築申請が出された時、PTAは年度代わりで三月総会が終わったばかりであったという。「一九五三年東京母親大会報告原稿 豊島園の場外馬券売場反対運動」（一九五三年）とあるのは、昭和五三年、一九七八年の記載ミスと推定、立教大学共生社会研究センター所蔵、蔵園正枝「全体の経過」（『豆ニュース』二四号、一九七八年四月四日）三頁より。
- (10) その様子は、練馬母親連絡会が毎月発行している『豆ニュース』二四号（一九七八年四月四日、立教大学共生社会研究センター所蔵）に詳細な情報が描かれている。
- (11) 「ひっくり返した『強行採決』 豊島園馬券場、まさに、住民パワーを発揮」（『豆ニュース』二四号）二頁。
- (12) 「三月の連絡会で話しあったこと」（『豆ニュース』二四号、

一九七八年四月) 一頁。

(12) 同右、同頁。

(13) 前掲「ひっくり返した『強行採決』 豊島園馬券場、まさに、住民パワーを発揮」(注一〇)、二頁。

(14) これは、練馬区の革新自治体を支える革新勢力が、「革新」という政治的な利害関係にとらわれず、あくまで練馬区の一住民として活動を行っていたとも評価できよう。つまり、運動体の原動力はあくまでも「区民としていかに地域を良くしていくか」、「そのためには行政(または都・国)にどう訴えていくのか」という点に重点が置かれていたのである。

(15) 「昭和五三年 第二回定例会 六月二十九日」(練馬区議会『練馬区議会会議録』第六八四号)、武藤芳雄(日本共産党練馬区議団)の発言より。

(16) 連絡会の蔵園が、賛成八件、反対二件の陳情・請願が都市環境委員会の付託になっていたことを知ったのは、三月一日であったという。前掲「全体の経過」(注八)三頁。

(17) 建築申請が出されたのちに委員会は計四回行われたものの、「請願・陳情を審議する都市環境委員会に本計画のおおよそがわかるとされる資料が提出され、審議されたのは、二十四日の早朝より一時間一六分、翌二五日の二〇分、合わせて二時間足らず」であったという。前掲「昭和五三年第二回定例会 六月二十九日」(注一五) 武藤芳雄の発言より。

(18) 前掲「三月の連絡会で話しあったこと」(注一一)、一頁。

(19) 前掲「ひっくり返した『強行採決』 豊島園馬券場、まさに、住民パワーを発揮」(注一〇)、二頁。

史苑(第八二卷第二号)

(20) 前掲「全体の経過」(注八)三頁。

(21) 前掲「ひっくり返した『強行採決』 豊島園馬券場、まさに、住民パワーを発揮」(注一〇)、二頁。

(22) 練馬区長の表明は、豊島園場外馬券売場の建築確認申請が取り下げられた後の一九七八年四月一七日に示されることとなった。「豊島園場外馬券売場 区長事実上の反対表明へ」『反対同盟ニュース』ナンバー五(一九七八年四月一七日、立教大学共生社会研究センター所蔵)。

(23) 小沼稜子「学校づくりとPTAのあゆみ」練馬女性史を拓く会『始まりはひとりから 練馬の女性たちの記録 総論編その一』(二〇一〇年)二四頁。

(24) 前掲「全体の経過」(注八)三頁。

(25) 「豊島園とうとう建築確認申請を取下げ」(『豆ニュース』二五号、一九七八年五月一九日、立教大学共生社会研究センター所蔵)三頁。

(26) 住民からの反対の声が強いことや、三月の区議会の混乱ぶりなどを考慮し、馬券売場建築確認申請は「諸般の事情から白紙に戻す」こととなった。『豊島園馬券』走らず 馬券売り場建設 確認申請取り下げ」(『読売新聞』一九七八年四月二十九日)。

(27) その後、この豊島園問題は一九七九年の国際児童年に合わせ、子どもの文化センターをつくるという「子どもの城」建設問題へと発展していくこととなる。「泊りこみの四月連絡会 国立婦人会館でスゴくご立派でした」(『豆ニュース』二五号)一頁。

(28) 桜井由機「練馬の女性と運動」練馬母親連絡会を中心に「練馬女性史を拓く会」『始まりはひとりから 練馬の女性た

「母親 たちはなぜ「座り込み」をしたのか（増淵・石倉）」

ちの記録 総論編その一』（二〇一〇年）二～三頁。

(29) 『母親』から主権者へ―練馬母親連絡会の報告』日本青年奉仕協会『青年と奉仕』No.110（一九七七年）所収、二二頁。

(30) 同右書、同頁。

(31) 早川紀代「戦後女性史研究の動向と課題」『年報日本現代史』編集委員会編『戦後地域女性史再考 年報・日本現代史第一八号』（現代史料出版、二〇一三年）所収、一九六頁。

(32) 前掲書『始まりはひとりから 練馬の女性たちの記録 総論編その一』（注二八）四頁。

(33) 前掲、蔵園正枝「全体の経過」（注八）。

(34) 練馬女性史を拓く会『始まりはひとりから 練馬の女性たちの記録 その一』（二〇〇三年）、一〇六頁。

(35) 前掲書『始まりはひとりから 練馬の女性たちの記録 総論編その一』（注二八）、五～七頁。

(36) 福富美津代「坐り込みに参加して」（『豆ニュース』二四号、一九七八年四月四日）。

(37) 岡田京子「PTA活動が私の原点―練馬女性史を拓く会『始まりはひとりから 練馬の女性たちの記録 その二』（二〇〇五年）、一一頁。

(38) 『練馬区婦人学習グループ一覽表』（一九七八年）、立教大学共生社会研究センター所蔵。

(39) 前掲「一九五三年東京母親大会報告原稿 豊島園の場外馬券売場反対運動」（注八）。括弧内は筆者註。

(40) 同右資料。

（本学大学院博士前期課程）